

石原莞爾が 1941 年「世界最終戦争論」と題して世間に発表した著作の書き出しには、(戦争は武力をも直接利用して国家の国策を遂行する行為である) と定義している。

米国大統領は今回のテロ事件で (これは戦争である) と全世界に向けて発言したが、21 世紀の戦争は果たして様変わりしたのかどうか？

石原莞爾は、終戦間もない 1945 年 10 月に「新日本の建設」の表題で京都、朝日会館に於いて講演されたが、その一節で八紘一字の説明の中で「狭小な国土に生きる 7 千万の同胞が、主として国内の資源を利用する簡素にして健康な生活営みつつ、最新科学文明の粋を活用して人類次代文化の真姿を世界に示すとともに、身に寸鉄を帯びずして近隣と民族協和の実を挙げるならば、一の理論闘争を用いず、もちろん武力に頼ることなく、闘争に悩む全人類に八紘一字の真義を信解せしめ得るものと確信するものである。・・・・・・・・

最終戦争時代の武力は必ずしも一国の組織的軍備によるものではない。

一研究所、一工場、時には一個人のすばらしい発明が一举に戦争の決を下すことも、あり得るのである。

八紘一字が真理であり、われらの建設が正しいならば、神はその神秘の力によって日本を助けるであろう。その時その発明が、いずれの国で成功するかはもとより問題にするに足りぬ。米国の発明でもソ連の発明であっても、来たって正義日本を衛護するであろう。

なお暴力の迫害に対しては、都市を解体した新国土が驚くべき抵抗力を発揮する」。と発言し、最終戦争時代に突入した現代の、同時多発テロを既に予測し得ていたともいえる。

莞爾の実弟六郎氏は、「石原莞爾の思想と人」の文章で、石原莞爾の「戦争放棄」を根本に据えた「永久平和論」の推移を、軍事学的視野での確・簡潔に纏めているので引用させていただく。

前掲の「新日本の建設」では武装放棄構想を大きく前進させたが、一方では組織的軍備でないと驚異的新兵器により最終戦争への出場もあり得ると、ひそかに想定していたのであろう。だが、兄の没後、東亜連盟の宣言に石原自身の加筆したものが発見された。

それには「・・・“身に寸鉄を帯びず生活そのものの力によって” この決勝戦に必勝を期する・・・」とある。これは「新日本の建設」の考えをさらに一歩進めたものと思われるから、加筆は 1945 年 10 月以降のことであろう。・・・・・・・・

死去の前年 1948 年 11 月に製作されたトーキーで、石原は完全に武装放棄に徹する考えを述べた。

「私どもは完全に武装を放棄したのです。

われわれは断じて利害を抜きにして、立正の大精神に立って国策を律していかなければならないと思います。

日本は蹂躪されても、かまわないから、戦争放棄に徹して生きていくべきです。

ちょうど聖日連が竜の口に向かって行くあの態度、キリストが十字架を負って刑場に行くあの態度を国家としてとる。」と語った。

ここに至って石原の「身に寸鉄を帯びず」の構想が完成したものと思う。

石原莞爾が非武装を唱えたのは、単に戦争が道義に反するという考えからではない。

最終戦争史観に立って、戦争が近く絶滅する事を前提としている事が、他のいわゆる「非武装」論者と全く異なるところである。

戦争がまもなくなくなるのだから、軍備に費やす努力と費用を、来るべき社会の見本を建設する事に廻して、やがて人類全部が迎える永久平和の先駆となろうとするのである。